

主 題：身に着けるべき新しい人①

聖書箇所：コロサイ人への手紙 3章12節

テーマ：キリストによって新しくされた者は何を身に着けながら生きていくのか？

今朝も一緒に学んでいきたいのは、コロサイ人への手紙3章のみことばです。タイトルにもあるように、“身に着けるべき新しい人”に関して、今回と次回の2回にわたって12－14節から考えてみたいと思います。内容に入る前に、いつものようにみことばをお読みします。それぞれ神様のことばによく目を留めてください。

コロサイ3：12－14

「12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

●ボビー・ギドリー

今から約20年前の話になりますが、ボビー・ギドリーというひとりの警察官がいました。35年にもわたって熱心に働いた彼は、退職するその日を迎え、最後のシフトも終わりまであと数分となったとき、上司から一本の電話を受けるのです。そして驚くことに、彼はある一つのことを理由に、そのタイミングで停職処分を受けることとなります。その理由は、間違った制服のシャツを着ていたことでした。本来なら、黒一色の制服であるべきところを、彼は最後の日、ブルーのシャツを着ていました。最初の日であろうが、最後の日であろうが、常にプロフェッショナルでいなければならないという上層部の意向に反した彼は、間違った制服、ただ、そのためにひどい結果を自分に招くこととなったのです。その職にふさわしい正しい制服を身に着けているということは、とても大切なことでした。そしてこれは、ほかの職業についても同じように言うことができます。例えば電車や飛行機に乗れば、そこに私たちはパイロットや車掌の制服を着た人を目にします。病院に行けば、そこに白衣を着たお医者さんを目にするのです。もし私たちが乗り込んだ電車や飛行機や手術室の中に、ただの寝間着を着た人が突っ立っていたら、大丈夫なのだろうかと不安を抱くかもしれません。正しい制服を身に着けているということは、ただ大切なだけでなく、その人がその職にふさわしい人物であるということも、周りに教えてくれるのです。

これは信仰者の歩みにおいても同じことが言えます。キリストによって救われた、私たちひとりひとりに身に着けるべきふさわしい制服が、ふさわしい格好があるのです。いったいどんな格好のことを言うのでしょうか？それこそがこれから見ていこうとしている12－14節で、パウロが教えてくれたことでした。もちろん先に言うておきますけれども、これは実際の服の話ではありません。霊的な服の話です。また、その服というのは、かつて身に着けていたような古い罪の性質のことでもありません。前回、前々回と見てきましたけれども、パウロは、キリストによって新しくされた者が以前の汚れた罪を完全に脱ぎ捨ててしまうことを求めています。そこで挙げられていた、例えば不品行や汚れや情欲や、悪い欲、貪りにしても、怒りや憤りや悪意やそしりや恥ずべきことばや偽りにしても、どれをとっても新しくされた者が身にまとい続けるのにはふさわしいものではなかったのです。だからこそパウロはそのようなものは脱ぎ捨ててしまいなさいと教えていました。

○身に着けるべき新しい人：新しく着るべき“態度”と“ふるまい”

そうして古いものを脱ぎ捨てた私たちは、代わりに新しく何を身に着けるべきなのでしょう？キリストと一つとされた、新しくされた者にふさわしい制服というのは、いったいどのようなもののことを言うのでしょうか？きょうは特に12節から、新しく着るべきキリストに似た態度について見てみたいと思います。ぜひ自分自身の歩みをみことばと照らし合わせて吟味してみてください。果たして、新しくされた者が身に着けるにふさわしい服を、今、自分は身にまとっているのだろうか、身に着けるべき態度という点において成長し続けているのだろうかとよく考えてみてください。もう一つ、この後、例えば同情心とか慈愛とか謙遜とか、いろいろなものが出てきますけれども、これまで自分が考えてきたそれぞれが、みことばが教えているものと同じなのかどうか、よく考えてみてください。私たちはみことばに沿った、みことばの基準にのっとった、そのような者として変わり続けていこうとするのです。ぜひ自分のこととして改めて考えてください。このみことばが皆さんの信仰の励ましになって、成長を助けるものになることを心から祈っています。

●思い出させた新しい“立場” 12a節

新しく着るべき態度を見ていく前に、パウロがとても大切なことを先に述べていたので、それを見ましょう。「身に着けなさい」という命令を与える前に、彼はあることをしていました。彼はまず信仰者に対して、自分たちがすでにどのような立場の存在なのかということ思い出させていました。パウロはキリストによって新しくされた者が、もう既にキリストにあって、どんな者へと変えられたのかをここでは特に三つのことばを用いて表していました。12節は「それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として」と始まっています。これが土台でした。この土台に立って、新しくされた者が身に着けて歩んでいこうとするのです。これらの三つのことばは、パウロが適当に列挙したものではありません。余りにも重要な真理を、今の私たちに教えてくれていました。

三つのことばを目にしたとき、気づかれた方もいるかもしれませんが、旧約の時代において、この「神に選ばれた者、聖なる、愛されている者」ということばは、それはただイスラエルを表すために繰り返し用いられていた表現でした。イスラエルこそほかの国々とは異なった、神様によって特別に選び出された聖なる民でした。もちろんこの選びに関して、イスラエルの民たちがそれに値するような何かすぐれた存在だったから、そのように選ばれていたわけではありません。そのようなものではなく、ただ神様の愛がその民を選び出したのだと、みことばは教えています。申命記7：6－8のところに「6 あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民だからである。あなたの神、【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた。：7 【主】があなたがたを恋慕って、あなたがたを選ばれたのは、あなたがたがどの民よりも数が多かったからではない。事実、あなたがたは、すべての国々の民のうちで最も数が少なかった。：8 しかし、【主】があなたがたを愛されたから、また、あなたがたの先祖たちに誓われた誓いを守られたから、【主】は、力強い御手をもってあなたがたを連れ出し、奴隷の家から、エジプトの王パロの手からあなたを贖い出された。」とはっきりと述べていました。かつてはただイスラエルだけが、神様のその愛によって選ばれた民でした。でも、今はそうではないのです。今はキリストの死と復活を信じ、キリストにあって救われた者はだれであれ、神様に選ばれた民と呼ばれるようになったのです。かつてあった区別、壁、そういったものはなくなり、聖なる、愛されている者として、私たち自身もみな今を生かされているのです。忘れてはいけません。キリストを知る前の私たちはみな、神様から離れていました。この世にあって、望みのない者として歩んでいたのです。しかし、以前は遠く神様から離れていた私たちも、今はキリストにあって一つとされ、キリストにあって新しく造り変えられたのです。ただ、神様がご自身の愛によって、私たちを選び出してくださったからこそ、私たちは罪を赦され、揺るがない希望にあふれて歩んでいくことが可能となりました。ただ、神様のその愛がそれを成し遂げてくださったのです。

救いというのは、当然、私たちの良い行いでも、私たちが値するようなすぐれた存在だったからでもありません。罪深い私たちにとって、永遠のさばき以外、何も値するものはありませんでした。でもそんな

私たちに対して、ただ神様が救いの御手を差し伸べてくださったのです。確かに救いは、最初から最後まで神様の恵みのみわざでした。その選びは測り知ることのできない神様ご自身の愛の表れでした。ほかの聖書箇所もこんなふうに言っています。エペソ 1 : 4 を見てみると、「すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。」とあります。Ⅱテモテ 1 : 9 にも「神は私たちを救い、また、聖なる招きをもって召してくださいましたが、それは私たちの働きによるのではなく、ご自身の計画と恵みとによるのです。この恵みは、キリスト・イエスにおいて、私たちに永遠の昔に与えられたものであって、」と書いてあります。限りある私たちの頭では、この圧倒的な真理のすばらしさのすべてを理解することはできないでしょう。でも神様は、世界のすべてを創造するその前から、私たちに心を留めていてくださったのです。キリストのうちにあるなら、その者をご自分のものにしようと、神様ご自身がその愛をもって、定めていてくださったということです。神様に対して愚かに歩み続けていた私たちを、神様が選んでいてくださいました。これはとてもすばらしいことです。この神様はいったいどれほど恵み深く、知恵に富んだお方なのでしょう。罪に汚れた私たちに目を留めてくださり、救ってくださるというのは、どんなに大きな愛のお方なのでしょう。そして私たちがこんなすばらしい神様の一方的な愛を受けたのであれば、私たちはその神様を心から愛して、受けた愛でもって互いに愛を实践する者として、歩んでいこうとするのです。私たちはいつも覚えていなければいけません。私たちの歩みは土台があります。値しないその恵みと愛を受けたことへの神様への感謝と喜びを忘れないことです。その土台をいつも覚えて、私たちは神様に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、古い人を熱心に脱ぎ捨てながら、新しい人を身に着けて生きていこうとするのです。あり得ないものを、値しないものを受けて愛されたから、私たちはその神様の愛されていることを喜んで求めて生きていこうとするのです。新しくされた者として新しいものを着ながら生きていこうとするのです。

1. 新しく着るべきキリストに似た態度 12節

●信仰者が身に着けるべき五つの態度：

では、具体的に新しい者としてどんなものを身に着けるべきなのか、パウロはここで私たちが新しく着るべきキリストに似た五つの態度を教えてくださいました。

a) 深い同情心

一つ目の態度として挙げられていたものは、「深い同情心」でした。このことばは、もともと二つのことば、他人の苦しみに対する気遣いや思いやりを表す「同情」と、人の内側を表す「心」が結びついて成り立っています。言いかえるなら、これは何かの苦痛や必要を覚えている人に対して、私たちが抱く心からのあわれみのことを表しているのです。ある注解者はこんな定義をしていました。「深い同情心とは、他人の苦しみを目の当たりにし、心が引き裂かれるような、憐れみの叫びのことです。」と。「深い同情心」を抱く者というのは、周りにいる何かの必要を覚えて、困っている人の必要をどうにかして満たしてあげようとするのです。苦しみに直面している人や困っている人を見たら、自分が身を引くのではなくて、苦しむ者とともに苦しもうとし、悲しむ者とともに悲しもうとするのです。そしてこんな深い同情心こそ、私たちの身に着けるべき、イエス様ご自身がはっきりと示されていたものでもありました。

いろいろなところで見ることができます。例えば、イエス様が地上で働きをなされていたとき、抱いておられたその態度が、このようにマタイの福音書の中に記されていました。マタイ 9 : 35 - 36 に「:35 それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病氣、あらゆるわずらいをいやされた。:36 また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。」と。それがイエス様の持っていた態度でした。また、これに加えて、イエス様がエルサレムに入城されるときの様子。イエス様こそローマの圧政から救い出してくださる約束の救世主だと信じ疑わなかった群衆たちは、「ホサナ！」と叫んで、喜び賛美していました。でもイエス様はそんな群衆を前にして、今まさに手を振って賛美している群衆が、数日後には自分を拒んで十字架につけろと叫ぶよう

になることをご存じでもあったのです。それだけでもありません。エルサレムの町には自分自身のことを憎んで殺そうと企み続けているパリサイ人や律法学者たちが存在していることを、イエス様は知っていたのです。でも、そんなエルサレムの町を目の前にして、イエス様がとった行動は驚くべきものでした。ルカ 19 : 41 に「エルサレムに近くなったら、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、」と描かれています。イエス様は、エルサレムの町のために涙を流されたのです。イエス様は別の行動をとることも容易にできたでしょう。ご自分の前には確かに十字架の苦しみが迫っていたのです。その苦しみを前にしたときに、自分の定めを嘆いて、ただ自分自身のことにのみ関心を払っていたとしてもおかしくはなかったでしょう。ましてや自分自身のことを忌み嫌って十字架につけようとするような者たちを前にしたとき、そのような人々に対して怒りや憤りや敵意を覚えたとしてもおかしくはなかったでしょう。エルサレムの町の愚かさや罪深さにもう呆れ果ててしまって、ああ、もういいや、どうにでもなってしまうと、ご自身が身を引いて放置したとしても、ある意味、それはこの町にとって当然の報いでもあったでしょう。でもそうはなさいませんでした。イエス様はそんな頑なな町のためさえ、心を激しく痛めて泣かれていたのです。こうして深い同情心を持っておられたイエス様は、どんなときも変わらずに、弱く愚かな罪人の覚える必要をみずから進んで満たそうとされていました。

そして感謝なのは、新しくされた私たちは、こんなイエス様とすでに一つとされているということです。このイエス様を私たちはもう知ったということです。だとすれば、この点において、私たちはどのように日々を歩んでいるでしょう？ I ヨハネ 3 : 17 に「世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。」と書いてありました。神様の大きな愛とあわれみを受けたと私たちが言うのであれば、その同じあわれみを喜んで示す者として、歩んでいこうとしているのでしょうか。ほかの人の必要や苦しみに自分から関心を払う者として、私たちは成長し続けているのでしょうか。私もそうですけれども、ある意味、私たちは自分に対して同情心を示してくれるような人には、同じように同情心を示すことは容易にできるかもしれません。自分自身にいろいろな余裕があるときは、それを示そうとするかもしれません。でもこの同情心というのは、自分によくしてくれる人にだけ示すものでも、自分にとって都合のよいときだけ示すものでもありませんでした。私たちの模範であるキリストは、十字架を前にしてなお、私たちに測り知ることのできないその苦しみを前にしてなお、自分を拒み、自分に敵対するような者に対してさえ、深いあわれみを示し続けようとしていたのです。私たちは、そんな方によって新しくされた者として、今を生かされています。キリストに似た深い同情心を身に着ける者として、今を歩み続けていこうとするのです。このような深い同情心を身に着ける者として、私たちは変えられ続けているのでしょうか。

b) 慈愛

次に、二つ目の態度として挙げられていたのは「慈愛」でした。これは今見た深い同情心と密接な関係にあります。このことばには、優しさとか、寛大さとか、相手の必要を満たそうとする親切な態度や行為といった意味が含まれています。そしてもちろんこんな慈愛というのも神様やイエス様がまず私たちにはっきりと示してくださったものでした。ローマ 2 : 4 を見ても、「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」と書かれています。また、イエス様ご自身も、ご自身のことをこう言われていました。マタイ 11 : 29 - 30 で「:29 わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」と。それが私たちの愛するイエス様の姿でした。忘れてはいけません。救われる前、私たちはみな例外なく敵として神様に逆らい続けていました。神様に感謝をささげることもなければ、罪に罪を重ね、ただ御怒りを受けるべき存在として、滅びへと向かっていたのです。そんな罪深い私たちに対して、神様がまず慈愛を示してくださいました。あわれみ深い恵みの神様が、私たちを悔い改めへと導き、罪から救い出してくださいまし

た。本来絶対に値しないような者に、その者が抱えていた最大の必要を与えてくださったのです。それこそが神様の慈愛、神様の親切でした。

そして、そんな神様の慈愛と親切を私たちが受けたのであれば、私たちもその受けたあわれみや親切をほかの人に示していくことが求められているのです。もちろんその優しさというのは、単なる感情やことばだけのものではありません。相手の必要を満たそうとする犠牲を伴ったものになるのです。具体的に聖書の中からいろいろ挙げることができますけれども、一つ具体例を挙げるとしたら、まさにイエス様が律法の専門家に語っておられたよきサマリヤ人のたとえがそうでした。改めてルカ 10 : 30 から見てください。「:30 イエスは答えて言われた。「ある人が、エルサレムからエリコへ下る道で、強盗に襲われた。強盗どもは、その人の着物をはぎ取り、なぐりつけ、半殺しにして逃げて行った。:31 たまたま、祭司がひとり、その道を下って来たが、彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。:32 同じようにレビ人も、その場所に来て彼を見ると、反対側を通り過ぎて行った。」と記されています。エリコに下る道中、強盗に襲われた人は間違いなく助けがなければ死んでしまうような状態にありました。そこを通りかかった祭司やレビ人は、倒れかけて、死にかけているその者のことを目にしていながら、道の反対側を通して助けようとはしなかったのです。

次に、その場所をサマリヤ人が通りました。この当時、ユダヤ人とサマリヤ人の間には大きな溝が存在していました。互いを忌み嫌っているような、憎み合っているような、そんな関係にあったのです。言うまでもなく、助けの手が差し伸べられる可能性を最も感じることでできない存在でした。でもそんなサマリヤ人が来たその後の様子が、33-35節に「:33 ところが、あるサマリヤ人が、旅の途中、そこに来合わせ、彼を見てかわいそうに思い、:34 近寄って傷にオリーブ油とぶどう酒を注いで、ほうたいをし、自分の家畜に乗せて宿屋に連れて行き、介抱してやった。:35 次の日、彼はデナリ二つを取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『介抱してあげてください。もっと費用がかかったら、私が帰りに払います。』」と続きます。ほかに通りかかった者とは違って、サマリヤ人は死にかけの弱った者をかわいそうに思って、みずから近寄り、そして助けを与えていました。そして彼を宿屋に連れて行くだけでなく、かかるすべての費用でさえ、代わりに払うと約束していたのです。そのすごさが余り思わないかもしれませんが、書かれてあるように、彼は旅の途中にありました。彼には目指している目的地があったのです。ましてや倒れていたのは自分と敵対する者でした。自分が介抱してお金を払ったとしても、何の見返りも期待できないような相手だったのです。それでもなおサマリヤ人は自分を横に置いて、必要を覚えている人のために、みずから進んでそれを満たそうとしました。自分自身のことではなく、必要を覚えている人の最善を、犠牲を払ってかなえようとしたのです。

私たちが模範とできるそのすばらしい例えを見ることができました。果たして私たちの示している慈愛は、親切は、普段このようなものでしょうか？家族や親しい友人だけではなく、たとえ自分に反感を覚えて敵対するような者に対しても、自分が神様から受けた慈愛を同じように表そうとしているのでしょうか？この慈愛というのは、兄弟姉妹との間においても非常に重要なものです。もちろんほかのものも重要ですけれども、慈愛はとても大切です。どうしてかというと、それは時に私たちはだれかから罪を犯された場合、その相手との関係において、ある種自分自身を中間に立たせようとしていることがあります。どういうことかと言うと、こんなふうに自分に言い聞かせるのです。相手に対して怒ることも、憤ることも間違っていることはよくわかっている、悪意やそしりを抱くことも、脱ぎ捨てないといけないうことも、私はよくわかっていると。だから、それらのことは喜んでやりましょう、でも、その相手に対してみずから近づくことはしたくありません。あえて自分から何かをすることはしたくありませんと。脱ぎ捨てるところまではしても、真ん中に立ち続けるのです。でも、それはみことばが教えている慈愛ではありませんでした。神様は私たちがただ罪を脱ぎ捨てるだけでなく、優しさを身に着けることを教えていました。脱ぎ捨てて中間に立つのではなく、みずから進んでそんな相手の必要さえも満たすことを

求めていたのです。確実に言えるのは、もし私たちが、神様がどれほど慈愛に富んだ存在なのかということを知らなかったり、自分自身がどんな慈愛を受けたのかということを忘れてしまったりしているのであれば、私たちはそんな慈愛を周りの人に示そうとは到底思わないでしょう。でも私たちが神様の慈愛を覚えるとき、私たちが敵として歩み続けていたときに、神様がみずから示してくださったその親切を覚えるときに、そのような慈愛を受けた者として、本来値しないようなあわれみを受けた者として、私たちはそれにならって、親切を身に着ける者として歩んで行こうとするのです。果たしてそのような慈愛を表す者として、私たちは変えられ続けているのでしょうか？

c) 謙虚

続けて、三つ目の態度として挙げられていたものは、「謙虚」でした。この「謙虚」ということばにはもともと「低く考えること」という意味が含まれています。謙虚な人というのは、自分自身に関してへりくだった考え方を、もっと言えば、自分自身に関して正しい慎み深い考え、評価を持っているのです。わかりやすく、C・J・マホーニーという先生がこんなふうに定義しています。「謙遜とは、神の聖さと自分の罪深さに照らして、自分自身を正直に評価することです。」と。よく考えてみてください。謙虚さというのは、私たちのうちから始まるものでも、私たちがほかの人と比べて自分自身を低くしないとイケないと考えて始まるものでもありません。本当の謙虚さというのは、私たちがみことばを通して、神様がどんなお方なのかを素直に認めるところから始まるのです。それがスタートです。神様がすべてにまさって、偉大なお方で、いっさい罪のない聖く、完全なお方であるということを素直に私たちが受け入れるのです。すると、そこには必ず謙虚さが生まれるようになります。なぜかという、その聖なる神様の前に自分自身の罪深さがはっきりと見えるようになるからです。神様の完璧な、完全な基準を目の前にするときに、私たちはだれひとりとしてその基準など満たすことのできない自分の愚かさ、弱さを覚えるのです。こうして私たちが聖い神様の、ただその恵みによって赦された罪人であることを正しく認めるのであれば、そこには思い上がりや傲慢さ、高慢というものは生まれてきません。ただ、神様に対する正しい恐れと感謝と、へりくだりが生まれるのです。

かつての信仰者たちもそのようにして確かに歩んでいました。まさにパウロもそうでした。彼はこんなことを自分自身に関して言っていました。自分自身に関して、パウロは慎み深い考えを持っていたのです。Ⅰテモテ1:13-15に「:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。:14 私たちの主の、この恵みは、キリスト・イエスにある信仰と愛とともに、ますます満ちあふれるようになりました。:15 「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に來られた」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。」と書いていました。パウロは、神様を知る前の、以前の自分の姿を正しく見ていました。パウロは神様を知ったときに受けたそのあわれみの大きさを覚えていました。パウロは神様の偉大さを、神様の姿を正しく心に留めていたのです。だからこそ、自分こそが罪人のかしらであるということを忘れませんでした。そしてそれゆえにへりくだる神様のしもべとして、人々にも喜んで仕えていました。自分自身ではなく、神様と人々のことに彼は関心を払い続けていたのです。

もちろんこの謙遜も、今の私たちにとって欠かすことのできない態度であることは言うまでもありません。パウロもはっきりとこう述べていました。ピリピ2:3-4に「:3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。:4 自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」と。謙虚さというのは、欠かすことができません。でも、残念ながら、家庭においても、教会生活においても、私たちはいろいろな人と互いに罪を犯し合ってしまうことが多々あります。この先も、私が皆さんに対して罪を犯すことも、皆さんの中で罪によって互いに傷つけ合ってしまうことだって必ずあるでしょう。そんな罪が存在している中で、もし、私たちのうちに謙遜がなければどうなると思いますか？もし私たちが、神様の前にどのような者なのかという自分の立場を忘れて、自分を

中心に考え、自分はこんな扱いを受けるべきではないと考え始めれば、確実に私たちの関係はこじれて、遂には壊れてしまうでしょう。だからこそ謙遜というのは必要不可欠なものでした。決して忘れないことです。聖い神様の目を通して、正しく自分自身を見ることです。ほかの人の罪を考える前に、完全な神様の前で、まず自分の罪深さを思い出すことです。ほかの人と比べるのではなくて、神様の前に出て、神様の聖さとあわれみを思い出して、自分自身の罪深さを心に留めることです。そしてもっと言うのであれば、そんな罪深い私たちを救い出すためにだれよりもご自身をへりくだらされたそのお方を、キリストの模範を心に留め続けることです。そうして私たちは謙遜を身に着けながら歩み続けていくのです。

d) 柔和

次、四つ目の態度として挙げられていたものは、「柔和」でした。この「柔和」ということばは、「穏やかで温和な態度」のことを表しています。穏やかな人です。ただ、もちろん勘違いしてほしくないのは、柔和な人というのは正しいことを妥協してしまうような弱い人のことを指しているのではありません。むしろ柔和な人というのは、たとえ困難が降りかかってきたとしても、すぐに怒りや悪意に揺り動かされてしまうのではなく、忍耐深く、穏やかな態度でふるまおうとする者のことを言うのです。ひとりの仲介者はこのことばをこんなふうに表示していました。「柔和は謙虚で穏やかな態度を表し、特に悪意や復讐心から解放された、攻撃に対して忍耐深く柔順であることを表しています。」と。柔和な人、もちろん私たちの周りにもいます。でも思い返せば、まさにイエス様こそ柔和な人でした。もうすでにきょう1回見ましたけれども、マタイ11章でイエス様はご自身をこう言われていたのです。マタイ11:29で「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。」と。イエス様の心はいつも心優しいものでした。少し考えてみましょう。イエス様は間違いなく心優しいお方でした。地上で福音を宣べ伝えて、困っている者を喜んで助けようとする、そのとき、ご自分をよく思わない、憎む者たちから絶えず攻撃や迫害を受けて、大いに苦しめられ続けたのです。本来であれば、いっさい値することのないひどい扱いでした。それでもなお、イエス様はご自分の受けたもので、個人的に憎しみや悪意を覚え、仕返しをすることはありませんでした。イエス様はそういったものに対してやり返す力を持っていなかったのでしょうか？いいえ、持っていました。この方はまさしく全知全能のお方、すべてをご自分の意のままにする力も権威も持っていたのです。でもイエス様は、みずから進んで苦しみを受け、最後まで柔和な者として歩み続けられたのです。

そして、そんなキリストの模範にならう者として、私たちは新しく召されました。だとすると、この点において、私たちはどのように歩んでいるのでしょうか？私たちのふるまいやことばは、どんなときも穏やかで心の優しいものでしょうか？それとも自分の思いどおりにならなければ、突発的な憤りや敵意によって支配されてしまって、激しいことばやだれかを傷つけるような態度にすぐ変わってしまうのでしょうか。箴言15:1に、特にことばについて「柔らかな答えは憤りを静める。しかし激しいことばは怒りを引き起こす。」とありました。私たちのことばは、人々がキリストの柔和さを見ることのできるような柔らかなものでしょうか？それともただ怒りや争いを引き起こすような激しいものでしょうか？新しくされ、キリストの柔和を知った私たちは、キリストに似た柔和を身に着けながら続けて歩んでいこうとするのです。そんな柔和な者として変えられ続けているのでしょうか？

e) 寛容

そして最後に、五つ目の態度として挙げられていたものは、「寛容」でした。この「寛容」ということばは、「我慢強い」とか、「忍耐」という意味を持っています。寛容な人とはどんな人かというと、例えば不当な扱いを受けたとしても、やり返そうとするのではなく、自分自身を制して、最後まで耐え抜くことを言うのです。ウィリアム・バークレー先生もこのことばをこんなふうに描いていました。「寛容とは、人々が愚かであっても忍耐を失わず、教えようがないように思えても苛立ちを募らせない力のことです。人の愚かさや強情さ、盲目で恩知らずな態度を受け入れ、それでもなお憐みを持って、努力し続ける力なの

です。」と。間違いなく私はこの点において成長しないといけないと思わされました。この寛容というのは、今の私たちにとって、ある意味最も困難な態度の一つかもしれません。というのも、とにかく速さを求める現代社会において、私たちの多くがただ待ち続けるということを余りしたいとは思わないからです。かつては、買い物に数時間かけていたものが、今はもう店に行くこともなく、すぐにネットで手に行うことができるようにもなりました。かつて、送った手紙は数日かかって届いていましたが、今はもうLINEやメールなどを通して、すぐに届いて、すぐに読めるようになりました。こうして多くのものが待たなくてもすぐに手に入って、すぐにできるようになったのです。確かに便利になりました。でも同時に、これは大きな問題をももたらすようになったのです。それは私たちがこの速さというものを、ほかのひととの関係にも当てはめようとするようになったことです。私たちはだれかとの関係において、すぐに自分の願ったとおりのことが起こることを求めることがあります。いつまで待たないといけないのですか、今すぐに変わってくれないと困るのです、こんなにたっているのに何も変化が見られないのであれば、もう無理なのではないですかと、私たちは思ってしまうのです。そうして、私たちは自分たちの望むときに、思いどおりのことがならなければ、がっかりして諦めてしまったり、怒りや不平、不満を覚えたりするのです。でもそれは神様が求めておられる寛容、忍耐ではありませんでした。いやもっと言うのであれば、それは神様ご自身が私たちに示してくださった寛容ではありませんでした。

みことばは言っています。先ほど見たローマ2：4に「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」と書いていました。Ⅱペテロ3：15にも「また、私たちの主の忍耐は救いであると考えなさい。」と書いています。改めて考えてみてください。救いにおいて神様が示してくださったその寛容さは、いったいどれほどのものだったでしょう。もし神様の忍耐が今、私たちひとりひとりが持っているものと同じものであったとすれば、どうなっていたでしょう。間違いなく、この世界はとっくの昔に消え去っていたでしょう。だからこそ忘れてはいけないのです。私たちが今生かされていて、何より救いを楽しむことができるのも、ただ神様の測り知ることのできない忍耐深さのゆえだということです。そしてその忍耐を私たちが知ったのであれば、その忍耐によって私たちが新しく造り変えられたのであれば、私たちも同じようにして周りの人々に寛容を示す者として生きていくことが求められているのです。私たちは自分の家族や友人に対して、教会の兄弟姉妹に対して互いに寛容を示す者として、今を歩んでいるのでしょうか？自分自身の思いどおりにならないとき、自分の願いどおりにことが進まないようなとき、果たして私たちは感情に支配されていないのでしょうか？それとも自分を制して、神様の働きに期待して、信頼しながら熱心に待ち続けようとするのでしょうか？大きな忍耐を受けて、新しくされた私たちは、ただキリストに似たその寛容を身に着けながら歩んでいこうとするのです。そのような忍耐を持つ者として、寛容な者として、私たち変えられ続けているのでしょうか？

さて、きょう新しくされた者の身に着けるべき五つの態度というものを一緒に学んできました。どうだったでしょう？深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容、どれをとっても、私たちはまだまだ成長しなければいけない部分が多々あるでしょう。でも、これらの態度というのは、私たちの模範であるキリストのうちに見て取ることのできる態度だということをいつも覚えることです。キリストこそ今まで見てきたように、必要を覚える者にいつも同情して、優しさの御手を差し伸べ続けられていました。地上に来られたこのお方は、どんな状況にあったとしても、へりくだって仕える者として柔和さを失わず、忍耐をもって愛を示し、遂には罪人のためにご自身のいのちを十字架の上でささげられたのです。このイエス・キリストの愛がなければ、その慈愛がなければ、謙遜がなければ、私たちは何の希望もない者として今も歩んでいました。でも、そんなすばらしい救い主によって救われたからこそ、新しくされ、選ばれ、聖なる者とされ、愛されている者だからこそ、私たちはキリストに似た者として歩んでいこうとするのです。そしてそのとき、私たちはいろいろな難しさを確かに覚えます。そのときに新しくされた者として生きてい

くのに必要なのはいったい何でしょう？それはみことばが教えてくれていました。コロサイ 3：1－4に、まず何を求めなさいと言われていました？私たちが上にある方を求め続けていくことでした。この方の姿にいつも思いを巡らせ続けていくことでした。その方にますます似た者となっていきたいがために、私たちが考えることも、心で思うことも、常に私たちを愛してくださったその素晴らしいお方の模範をいつも心に留め続けて歩むことです。でも、私たちのうちにそんな力はありません。神様の助けを祈り求めながら、新しくしてくださった方を覚えて、新しい者にふさわしい態度を、その制服を身に着ける者として今週も歩んでいきましょう。